

ヨ ッ ト 部

徳久 剛史

ヨット部の紹介

ヨット部の創成は、千葉医科大学水上部の関野康男（昭和25年卒）や石川芳光（昭和25年卒）らが山中寮所有のヨットを用いて山中湖で帆走を楽しんだことに始まる。昭和26年には「千葉医科大学ヨット部」が誕生し、鵜飼恒（昭和26年卒）、大濱博利（昭和26年卒）、町沢清太郎（昭和26年卒）らが山中寮や勝山寮を中心として練習を開始している。このころからヨット部員は医学部の山中寮や勝山寮の寮委員となり、練習ばかりでなく寮の宿泊客をヨットに乗せるサービスもするようになった。昭和27年には中野操一（昭和29年卒）が主将となり、千葉大学の他学部および看護学校生徒を加えて全学的な「千葉大学ヨット部」へと発展した。その後、昭和40年代には部員数も40名を超え、インカレ戦の1部校として大活躍していた。しかし昭和50年代になると医学部の教育カリキュラムが多岐膨大となり、医学部のヨット部員は他学部のヨット部員と同じ練習時間を取ることがきわめて困難な状況になった。そこで昭和60年代の初めに「医学部帆走部」という名称で医学部ヨット部が新たに併設された。ここでは千葉大学ヨット部創立60年に及ぶ歩みのなかから「千葉大学医学部百周年記念誌」に記載された内容以降の最近35年間の歩みと、この間に併設された医学部ヨット部の歩みをまとめる。

千葉大学ヨット部

昭和44年に、第四代部長の三輪清三教授（第一内科学）に替わって香月秀雄教授（肺癌研究施設）が第五代部長に就任した。この頃は部員数も増加の一途であり、新入部員が夏の合宿まで40名を超える時があった。しかし、インカレ戦では2部と3部を行ったりきたりしていた。昭和46年に斉藤威（園芸学部）が主将となり新艇の購入やセールの更新などを積極的に行い、かつ激しい練習を重ねた結果、春秋インカレ3部戦では総合1位で2部戦に進出した。さらに2部戦では総合2位となり、ヨット部創設以来始めてインカレ1部戦に駒を進めることが出来た。1部戦でも好調で、総合9位という成績をあ

げることが出来た。その後、常滑で行われた全日本インカレに初出場し、A級ディンギーは6位入賞を果たした。昭和51年には香月秀雄教授が学長になられたため、本田良行教授（第二生理学）が第六代部長に就任した。創部25年が過ぎて、OBの数も200人を超し、昭和34年に発足した「ほたて会」（OB会）の結束が強くなってきたのもこの時期であった。昭和52年のインカレ戦では、加瀬川均（昭和53年卒）率いるチームが久しぶりに江ノ島で行なわれた全日本インカレに出場した。この他にも優秀な選手が多く育ち、部活動は安定期を迎えていた。昭和58年には本田良行教授に替わって藤村眞示教授（第一生化学）がヨット部OBとして初めて第七代部長に就任した。続く昭和60年代、平成初期は更に部員の数も安定し、女子部員の中には国体の千葉県代表や東京都代表になる選手も出てきた。ところが、平成8年以降は部員の確保がままならず、平成10年の春のインカレはついに欠場という状態になってしまった。平成11年には、藤村眞示教授が退職されたため、徳久剛史（分化制御学）が第八代部長に就任した。その後は、少人数ではあるが毎年インカレ戦に出場して頑張っている。平成15年には、ほたて会幹事長の大濱博利（昭和26年卒）が中心となって創部50周年の記念式典を幕張において盛大に挙行了した。

一方クルーザー部門では、昭和42年に「くろしおⅡ」（33フィート）が、大学とOB会の協力で進水した。しかし、進水間もない昭和43年7月に行なわれた鳥羽パールレースに於いて、折からの台風のため漏水、電気系統の不調に加えてラダートラブルにより遭難した。しかし、幸いにも艇長の好判断などで全員無事救出され、放棄された艇も回収され修理された。その後は、多くのレースで好成績を修めた。昭和55年には、「くろしおⅢ」（33フィート）が進水した。また、平成4年には「くろしおⅣ」（34フィート）が進水した。平成10年頃までは部員が多く、週末の練習ではメンバー全員が艇に泊まることが出来なくなってしまい合宿所を借りての活動となった。しかしクルーザー部門でも平成15年頃から部員が集まらなくなり、とうとう平成20年からは現役の部員だけでは帆走できなくなってしまった。そこで若手OBも参加して、積極的な部員集めがおこなわれ

た。その結果、平成21年には、新たに多くの新入部員を集めることが出来た。

千葉大学医学部ヨット部

千葉医科大学ヨット部が千葉大学ヨット部へと発展してから20数年間は医学部の部員が大多数を占めていた。しかし、昭和50年代になると医学部の教育カリキュラムが多岐膨大となり、医学部学生は長期間にわたる合宿練習などへの参加が難しくなり、医学部の部員は数年に1名程度と著しく減少してしまった。このような状況の中で、昭和50年代後半になり木元正史・菊野薫・津山嘉彦・門澤秀一（ヨット部員）ら昭和60年卒の医学部学生から当時ヨット部の部長であった藤村眞示（昭和35年卒）に、医学部学生でも参加可能なヨット部再建への強い要請があり、平嶋毅（昭和32年卒）と山浦晶（昭和40年卒）が中心となり全学のヨット部とは別に「医学部ヨット部」を併設すべく尽力された。同じ大学内にもう一つのヨット部を併設することのマイナス面や医学部学生でも参加可能なヨット部を再建することのポジティブ面を考慮した結果、昭和58年に「医学部帆船走部」という名称で発足させることとなり、平嶋毅（第二外科学）が初代の部長を、木元正史（昭和60年卒）が初代主将を務めた。初代学生らは競技艇も無く、勝山寮でプレジャーボートを買い練習し翌年（昭和59年）に東京医大から借用した470で東医体に参加した。いずれのメンバーも470の経験なく戦績は望むべくも無かったが、全艇完走し470とそのレースのすばらしさに魅せられ、東京医大と交渉の末にこの中古艇を部員のカンパで購入し、後輩に託した。平成2年には、平嶋毅（昭和32年卒）の転出にともない山浦晶（脳神経外科学）が第二代の部長に就任した。

平成6年には山浦晶教授に替わって徳久剛史（昭和48年卒）が第三代部長に就任して現在に至っている。そして平成8年頃から、佐藤嘉治主将（平成10年卒）の下で徐々に新入部員も増加し、名称も「千葉大学医学部ヨット部」と改名した。艇の購入、練習の充実等で平成10年には部員数30数名を擁し、東日本医科学生総合体育大会（東医体）ヨット競技部

門を主管し、個人戦で優勝、団体戦で6位入賞となった。翌年の平成11年の東医体では、団体戦で優勝している。近年は部員数も25名前後で安定しており、稲毛ヨットハーバーで全学ヨット部との合同練習に励んでいる。その成果として、東医体の団体戦では毎年上位に入賞している。平成7年には、中島伸之教授（第一外科学）と山浦晶教授の二人のヨット部OBが中心となり、全学ヨット部の医学部OB達にも呼びかけて「OB会」も発足した。初代のOB会長は、相楽恒俊（昭和31年卒）が務めた。その後、平成11年からは中島伸之（昭和36年卒）が第二代OB会長に就任し、さらに平成19年からは山浦晶（昭和40年卒）が第三代OB会長に就任して現在に至っている。平成11年には「部報」第1号が発行され、その後年に2回刊行されOB達に配布されている。

東日本医科学生総合体育大会ヨット競技部門でのレース成績（入賞のみ記載）

団体戦	個人戦
平成9年度：6位	4位（佐藤・深谷） 6位（横井・山田）
平成10年度：6位	優勝（横井・篠崎）
平成11年度：優勝	2位（深谷・山崎） 5位（加藤・横山）
平成12年度：3位	5位（篠崎・山下）
平成13年度：準優勝	2位（横山・松村）
平成14年度：優勝	3位（吉田・山本 竹下） 6位（野口・牧，井口）
平成15年度：準優勝	4位（竹下・宮本） 5位（松村・長澤，李）
平成16年度：準優勝	2位（竹下・柴橋）
平成17年度：4位	
平成18年度：準優勝	5位（柴橋・宮本）
平成19年度：5位	
平成20年度：3位	4位（宮本・米田）
平成21年度：準優勝	3位（田仲・米田） 4位（松林・加藤） 5位（澤田・山内） （とくひさ たけし）